

I. 研究の目的

II. 方法

5. 分析の観点：①提示刺激全体に興味領域（AOI）を設定し、注視時間、注視点の数の中央値と四分位偏差を算出し、群間の差の検討をした（Mann-Whitney U 検定）。②群内で難易度による差の検討（Wilcoxon 符号付き順位検定）と全問正解率との関連を検討した。③提示刺激ごとに興味領域（AOI）を設定し、注視時間の平均を算出し、長いもの3つについて、群ごとにその特徴を検討した。

6. 研究倫理：本研究は、筑波大学人間系倫理委員会の承認を得て実施した(筑 2020-194A)。

III. 結果と考察

Table 1 眼球運動データ（課題1）

Table 2 眼球運動データ (課題2)Table 3 提示刺激ごとの注視時間（課題1）

() は左手 (左右対称) = 誤答

○ 是一部左右对称 - 解答

照時間を要しているが、他方、手話群では、参照時間が短く、かつ全員が完答していた。このことから、内容が同じ課題においては、視覚的方略が、口話群と手話群では異なることが考えられた。課題2の図形の内容、難易度が異なる課題においては、口話群も手話群も、難易度があがると若干、参照に時間を要するものの、正解率は高くなる特徴がみられた (Table 2)。③課題1においては、口話群は、5個課題も10個課題も45°の刺激において、頻繁に参照していることが示された。答えた割合から5個の課題において誤答していることから、10個課題では慎重に参照していることが考えられた (Table 3)。課題2においては、課題1でも同様に、口話群も手話群も、参照時間が長い刺激(角度)の3つのうち、1つあるいは2つが共通しており (Table 4)、今後は、その詳細や特徴を検討すること、対象を増やしての検討が必要であると考えられた。

IV. 文献：：紙面上の都合により省略。

※本研究は 2020 年度 JSPS 科研費 JP19H01697 の助成を受けて行われたものである。

(SAIGUSA Satoe, ISHIDA Yuki, CHUNG Inho)